

伊豆の踊子

2008(平成20)年10月12日鑑賞<DVD 鑑賞>

★★★★



監督・脚色＝西河克己／原作＝川端康成／出演＝高橋英樹／吉永小百合／大坂志郎／堀恭子／浪花千栄子／茂手木かすみ／十朱幸代／南田洋子／宇野重吉／浜田光夫（日活配給／1963年日本映画／87分）

……戦前戦後を通じた全6作の中、さゆり「踊り子」は4作目。さて、美空ひばり、山口百恵、内藤洋子らと吉永小百合の「初々しさ」の勝負は……？
一高生と踊り子との間の身分違いの淡い萌え心と悲哀を、伊豆の旅情とともにタップリ味わいたい。ちなみに、『伊豆の踊子』は高橋英樹との本格的コンビだが、浜田光夫の「純愛コンビ」とどちらがフィット……？



さゆり「踊り子」は4代目

川端康成の名作『伊豆の踊子』は、戦前戦後を通じて何と6度も映画化されているが、あなたはそのうち何人を知ってる？ 映画通のあなたが挙げるのは、美空ひばり、吉永小百合、山口百恵だろうが、さてその他は？

年配の人ならそれに加えて戦前の田中絹代を、団塊世代なら内藤洋子を挙げるかもしれないが、さてもう1人は？ それは鰐淵晴子。ちなみに、それぞれの製作年と監督、共演者名を整理すると次のとおりだ。

①『恋の花咲く 伊豆の踊子』（33年）——五所平之助監督、田中絹代、大日方傳主演

②『伊豆の踊子』（54年）——野村芳太郎監督、美空ひばり、石濱朗主演

③『伊豆の踊子』（60年）——川頭義郎監督、鰐淵晴子、津川雅彦主演

④『伊豆の踊子』（63年）——西河克己監督、吉永小百合、高橋英樹主演

⑤『伊豆の踊子』（67年）——恩地日出夫監督、内藤洋子、黒沢年男主演

⑥『伊豆の踊子』（74年）——西河克己監督、山口百恵、三浦友和主演

したがって、1963年のさゆり「踊り子」は4代目。ここでちょっと不謹慎な評論

をすれば、『伊豆の踊子』はいわゆるエッチビデオ（アダルトビデオ）にもたくさんある。だって、世の男性諸氏にとって『伊豆の踊子』バージョンは、結構スケベ心を助長させるものだから……？ こんな紹介をしたからといって、急にレンタルビデオ店へ走り出さないでほしいものだが……。

トップタイの西河克己監督の演出は？

2008年の『まぼろしの邪馬台国』で113本となる吉永小百合の出演作のうち、監督ベストワンは斎藤武市監督と西河克己監督で14本ずつでトップタイ。

サユリストである私の独断と偏見によれば、斎藤武市監督の代表作は『愛と死をみつめて』（64年）が突出しているが、西河克己監督の代表作は『若い人』（62年）と『青い山脈』（63年）で、『伊豆の踊子』は3番手。しかも、1962年の『キューポラのある街』と1964年の『愛と死をみつめて』のちょうど真ん中の1963年につくられたのが『伊豆の踊子』だ。

さあ、西河克己監督は、日本人なら誰でも知っている『伊豆の踊子』で吉永小百合の魅力をどのように引き出したのだろうか？ そのキーワードは、もちろん初々しさ。そんな視点から、当時18歳の小百合ちゃんの初々しい魅力をタップリと。

物語はいたってシンプル

この映画の時代は、昭和初年（1926年）。そしてストーリーは、一高生（現在の東大生）の川崎（高橋英樹）が旅芸人一座と共に伊豆を旅する数日間の中で生まれる、川崎と踊り子薫（吉永小百合）との淡い恋心を描くもの。

そこで、注目すべきはお互いの身分。今は芸人の地位が向上し、逆に大学生の地位が低下しているが、昭和初年当時は、一高生は「末は博士か大臣か！」と言われていた超エリート。それに対して、旅芸人は茶店に「物乞い、旅芸人は村に入るべからず」の表札があることからわかるように、下の下の人種。したがって、天下の一高生としがない旅芸人一座の踊り子との淡い恋など成立可能性はゼロ……。

そんなことを言ってしまうえば身も蓋もないが、川端康成の短い小説が長年日本人に愛されてきたのは、そんな数日間の淡い恋模様が美しい伊豆の景色の中で展開されていくため。しかし、この映画の坂和的キャッチコピーは「身分違いの淡い萌え心と悲哀を、伊豆の旅情とともにタップリ味わおう！」というものだ。

大坂志郎と浪花千栄子がいい味を

『愛と死をみつめて』は吉永小百合と浜田光夫の2人がほとんど出ずっぱりで静かな熱演を見せる映画だったが、『伊豆の踊子』は、自分の口からはなかなか話を切り出せない川崎と薫に代わって、旅芸人のリーダー栄吉（大坂志郎）が何かと話題づくりを。また、一座の財布を握っている陰のリーダーが、栄吉の妻千代子（堀恭子）の母親お芳（浪花千栄子）。

昔は役者だったという栄吉は結構ロマンチストで、人情の機微がわかるいい男だが、お芳の方はもっと現実派。したがって、薫が本気で川崎にホレ始めているようだと思ったお芳は、ある時期からブレーキ役をつとめることに。伊豆の旅が終わった後、そのまま川崎が『波浮の港』で有名な大島を訪れ、数日間滞在するようなことになれば、一体どうするの……？ そりゃ、その間川崎も薫も楽しいだろうが、その後は一体……？ ロマンチストの栄吉もお芳からそんな説明を受けると、これ以上2人の淡い恋心が発展することを止めざるをえないことに……。

川崎と旅芸人一座が宿泊した湯ヶ野のお清（十朱幸代）とお咲（南田洋子）の悲しい物語も興味深いが、若手の吉永小百合と高橋英樹を温かく見守る大坂志郎と浪花千栄子が見せるいい味にも注目を。

高橋英樹との本格的コンビだが、浜田光夫も登場

高橋英樹は08年のNHK大河ドラマ『篤姫』でも島津斉彬役でドラマの前半大きな役割を果たしたが、今や彼は時代劇、現代劇を問わず、なくてはならない貴重な存在。『伊豆の踊子』は1963年6月に公開されたが、その半年前の1963年1月の『青い山脈』で、高橋英樹はギリシャ時代の哲学者の言葉を語るのが大好きなガンちゃんこと富永安吉役を演じていた。しかし、私の目にはこれはあまりフィットした役とは思えなかった。それと同じような意味で『伊豆の踊子』における一高生の川崎役の高橋英樹もあまりフィットしているとは思えず、私の目には和泉雅子と共演した『男の紋章』（63年）の方がよほどピッタリという感じが強い。

高橋英樹は吉永小百合と計13本共演しているが、『伊豆の踊子』はその代表作。ところが、西河克己監督はそんな吉永小百合・高橋英樹共演作にも、「純愛コンビ」である浜田光夫・吉永小百合を登場させているから、それにも注目。とはいっても、そ

れは昭和初年のあの時代を回想する冒頭シーンとラストシーンのほんの一瞬だけ。特に吉永小百合は顔がチラリと見えるだけだから、よほど注意していないと見逃してしまうかもしれないほど。昭和初年に伊豆を旅した一高生が高橋英樹なら、それから数十年後浜田光夫扮する教え子から結婚式の仲人を依頼され、その相手がダンサーだと聞いたことから、昔を懐かしく思い出す東大教授は一体誰が演じているの？ そんなところも、しっかりとあなたの目で確認してもらいたい。

印象に残るセリフを1つだけ

『キューポラのある街』でも『愛と死をみつめて』でも、名作には印象に残る名ゼリフがある。しかし、『伊豆の踊子』における名ゼリフは、「下田に着いたら活動に連れて行って下さいませ」という踊り子のセリフ。といっても、今ドキの若い人は「活動」って何のこと？ と言うはずだ。活動とは「活動写真」、つまり映画のこと。

踊り子薫は、何と碁が打てるらしい。そう聞き、川崎は薫のチャレンジを受けて立つのだが、黒石を持った薫が初手に打ったのは天元。もちろん囲碁でも天元から打つ手筋はあるが、川崎はこれを見て「何だ、五目並べか」とわかったが、薫にしてみれば碁は五目並べのこと。

そんな薫にとって、スクリーン上で人間が動き回る活動写真は何よりの楽しみだったらしい。そんな初々しい踊り子から、「下田に着いたら活動に連れて行って下さいませ」とねだられたら、さてあなたなら……？

2008(平成20)年10月22日記